



第68号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成28年3月1日
印刷所
藤田印刷(株)



SSHの中間発表 (2015年10月15日・釧路新聞社提供)

湖陵高校を振り返って

釧路湖陵高校校長 宮下 祐司



湖陵高校に勤務して3年間、栗林延次前会長、島本幸一会長をはじめ、同窓会の皆様には公私ともに大変お世話になりました。とりわけ、私が釧路生まれであることもあり、多くの出会いをさせていただいたと感謝しております。

さて、数十年前の湖陵高校とくらべ、現在の生徒の傾向として感じたことがあります。

一つは、女子生徒の増加であります。私と同年代の方の頃は、普通科で男女比がおおよそ7・3ぐらいだったと記憶しておりますが、現在では、ほぼ5・5で女子が多くなっております。学年によっては4・6と女子が大きく上回っている学年もあります。また、理数科では学級に数名し

かいなかった女子が各学年10名を越え、現3年生は女子が18名で男子と肩を並べる状況にあります。男女平等参画社会の進行が湖陵高校でも起きてきているのかという感想を持っています。

もう一つの変化は、理数科の生徒が文系に進学する率が大幅に減少したことかと思っております。スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の取組などが、地域の皆さんに理解され、多くの中学生が理系への道に関心を持ち始めた証であると考えており、SSHの効果を一層高めていくことの重要性を感じております。

100周年を終え、新世紀の湖陵の始まりに赴任し、新しい湖陵高校の創造を目指してきたつもりであります。多くの方からのご指導により、少しずつではありますが、前進をしている感を持っております。今後とも同窓会の皆様のお力添えをお願い申し上げます。

※宮下校長は、釧路湖陵高校校長を最後に、教職員生活にピリオドを打ちます。

音楽の語り部 佐藤昌之さん(湖陵2期)...	2頁	釧路市文化賞 中江紀洋さん(湖陵15期)...	6頁
合唱部、文芸部全国へ	3頁	釧路湖陵同窓会総会	7頁
誠愛勇から(20期の巻)	4・5頁	同窓会、同期会ニュース	8、9、10頁
釧路教職員湖陵会	5頁	編集後記	10頁

湖陵同窓会HP <http://kushiro-koryo.sakura.ne.jp/>

音楽を通じて少年時に体験した空襲を後代の人々に伝えるための語り部を続けている湖陵OBがいます。佐藤昌之さんで、佐藤さんは吹奏楽と合唱曲からなる現代音楽の作曲と指揮を手がけました。釧路空襲受難詩曲 無名市民「釧路空襲鎮魂曲」が正式のタイトルです。

トロンボーン、トランペット、ホルンの3種の金管の超低音が、長い序奏部を展開。洋上の闇の一点から次々と釧路海岸目指して飛来する、米軍機グラマンのエンジン音がイメージされています。

♪かぜのなかに ほしくずの

と男声合唱(作詞・新井章夫さん)が始まります。ハーモニより、多くの旋律が絡み合う多声音楽(ポリフォニー)の様式。発声は仏教音楽の声明(しょうみょう)とあって、経文の朗唱を聞く感じ。

吹奏楽後半に、トライアングルのような、かすかな音が絶え絶えに鳴っています。実はキーボードの合成音。このささやかな音の筋こそ、死者の魂を鎮め心の平安を願うパッセージで、曲全体の中で光が当たる部分です。

「鎮魂曲」は当初の合唱曲だけから、吹奏楽を含む総合的な作品になるまでに40年。その間、自宅火災に遭ったが、編曲者・立原勇さんの協力を得て完全版が完成。釧路市民吹奏楽団(団長・小野秀美さん)、釧路吹奏楽団有志(代表・佐藤昌之さん)、混声

釧路空襲鎮魂曲

完全版に40年

音楽の語り部 佐藤昌之さんまさゆき(湖陵2期)



自宅にて智洲子夫人と

合唱団「アンラコロ」(代表・伊藤俊雄さん)の約50人の編成、2014、15年と2年連続計3回の演奏会を開き、成功までこぎつけました。

「鎮魂曲」の隅々に、1945年7月14日の空襲当時、旧制釧路中学2年だった佐藤さんの体験が渦巻いています。「その朝グラマンの音で目が覚めた。空襲が納まったあとの町の姿たるや川上町、旭町、末広町が焼け野原。栄町の空き地(現在の栄町平和公園)には遺体が折り重なっていました(2015年7月14日釧路空襲慰霊の集い点灯式でのあいさつ)」。

釧路空襲慰霊の集い実行委メンバーの小棚木(こたなぎ)幸子さんは「佐藤さんは戦争や空襲とかかわりのある時、新聞や放送に書き、話し、小学校に向いてやさしく語り続けるので、語り部にピッタリ」と強調します。

高校1年から金管の手ほどきを受けた小野秀美さん(トランペット担当)は「釧路の吹奏楽が飛躍的に向上したかげには佐藤さんの指導力による所が大きい」と指摘。「鎮魂曲」について「難しい曲ですが練習と学習でなじみになります。釧路市民の精神的な遺産として守らなければなりません」と決意を込めて力説します。

新卒業生に贈る言葉は、聞きそびれました。でも84年の生涯から「辺りや目先のことに捕らわれず、好きなことをやり通し、信ずる所を進みなさい」と話しているように思われました。

堀川 春昭(湖陵12期)

めざましい活躍

合唱部と文芸部

釧路湖陵高校の文化系部活動が、特に近年、めざましい結果を残しています。VOK（湖陵高校放送局）の全国大会出場は記憶に新しいですが、2015年度は、合唱部が高文連で24年ぶりに最優秀賞を獲得し、全国大会への出場を決めました。さらに、文芸部から2人が高文連の文芸コンクールに入賞し、同部では初めて全国大会へ出場します。合唱部と文芸部に今後の活動や目標などについて話を聞きました。

須貝 喜治（湖陵49期）



全国大会に向けて練習に力が入る合唱部

現在22人で活動する同部は、8月に広島で行われる全国大会や3月29日に行われる定期演奏会に向けて練習に励んでいます。「柔軟や筋トレ、発声などの基礎練習は絶対に手を抜かないです」と小玉裕果部長は基礎練習の大切さを強調していました。練習中、意見の食い違いが出た時などは「最終的には先生の判断になりますけど、直前までとことん話し合います」と時には部員同士衝突しながら、お互い納得いくまで話し合い、全員が同じ着地点を見つけたことが全国大会出場へとつながりました。

藤丸絢未副部長は「賞が取れたのは卒業した先輩たちのおかげだと思います。いなくなっただけから隙が多いと思います。もっと強くならなくちゃいけませんね」と厳しく自分たちを見つめていました。「体一つで何でも表現できる合唱は本当に楽しいです」と合唱の楽しさも語っていました。また、小玉部長は「釧路の合唱人口をもっと増やしたいんです。合唱が大好きな私たちが、未来を開きます」と自信を見せました。

文芸部 初めての全国



全国大会に出場する鈴木さん（左）と小林さん（右）

鈴木晴菜さん（2年）と小林文香さん（2年）の作品が、第30回全国高等学校文芸コンクールに入賞しました。文芸部は、過去に何度か入賞を果たしていますが、全国大会への出場は初めてです。2015年10月に行われた全道大会で、鈴木さんが小説部門で最優秀賞、短歌部門で入選、小林さんが短歌部門で優秀賞、小説部門で入選

るとのこと。対照的な創作課程ですが、良き創作仲間としてお互いを認め合っています。

顧問の笹原竜矢先生は「生徒の可能性を本当に感じます。学校に収まらず、いろいろ発信していきたい」と笑顔を見せました。また、全道大会で入賞した2人の作品は、同校で閲覧することができます。

しました。鈴木さんは「目指していたところだったので、本当にうれしい」と話し、小林さんは「2人とも受賞できたのがうれしかった」と笑顔を見せました。

小林さんは、普段からじっくりと考えながら作り、短歌のストックは200首を超えるそうです。一方、鈴木さんは、思いついた時にメモを取り、ある種のひらめきで作品を作

故郷は遠きにありて 思うもの

湖陵20期・3年D組 斉藤 裕 ひろし

私は昭和43年3月に卒業しました。団塊の世代のまっただ中、中学校は北中で14クラス、今と違い1クラスに55、56人もいました。人生至るところで競争の波にもまれ損をしたような気がします。

高校を卒業してすぐ、東京・仙台・札幌に居住して、13年前まで札幌に長く住んでいました。ですから20期を代表して寄稿するなんて、ふさわしくないと思います。でも故郷に居ない分、故郷・釧路を懐かしく思う気持ちは人一倍強かったと思います。帰郷したとき北の空に、くつきりとそびえ立つ阿寒岳を見ると、啄木の次の句を思い起こします。

神のごと 遠く姿を
あらはせる
阿寒の山の 雪のあけぼの

できれば「釧根原野と阿寒岳の見えるお墓に入りたい」なんて思います。何分もう66歳ですから、そんな事を考えてしまうんですね。

同期の方の情報はあまり多くはなく、3年D組を中心に紹介します。

やはり一番の思い出は修学旅行です。青函連絡船に乗って裏日本を経由して金沢で

一泊しました。兼六園は日本三大庭園の一つで、さすがに今まで見た庭園の中では一番きれいだと思いました。京都では、信長が暗殺された本能寺のすぐ近くの旅館に泊まり、歴史を身近に感じ入りました。また、京都での自由時間、私たちは二条城に行きました。中には変わり者がいて田宮次郎主演の「白い巨塔」を観に行った者もいました。

東京では自由時間に叔父さんに連れられて、神宮球場での早慶戦を見に行きました。が、それ以外はあまり覚えていません。

学校の活動では3年生の時に演劇で菊池寛作の「海の勇者」を演じ、最優秀賞をとりました。後で考えてみると演劇部の永田秀郎先生が審査員でした。演劇部の部長が同じクラスにいたからかもしれません。恥ずかしい話では、3年生の時、校内大会のバスケットボールで1年生に負けた苦い経験があります。

札幌・定山溪で40歳の時、クラス会をしました。担任だった生物の佐藤武雄先生が江別市野幌に住んでおりました。奥さんも亡くなり、一人暮らしでした。ちょうど先生は市立病院に入院しており外泊はできませんので、私が病院まで迎えに行きました。行き帰りの車中で先生は、あまり自分の事は



2009年10月31日に釧路全日空ホテル(当時)で行われた還暦同窓会



高校時代の3年D組 (卒業アルバムより)

しゃべらない性格ですのに、自分の事を赤裸々に話してくれて、とてもびっくりしました。鉦路では、私たちのクラスが最後の担任でした。その後は司法試験に挑戦しておられました。
とにかく先生は皆に会えて、うれしくてうれしくてしょうがないという感じで、私たちも最高に楽しい時間を持ってました。20人ほど参加しましたが、クラス会は始まる「時」は、すぐに20年以上遡り、皆昔の気持ちになりました。この世に出て10人の敵と戦っている男性、子どもを育てることに奮戦している女性、皆癒やしを感じて散会しました。

3カ月ほどたった頃、鉦路在住の同級生

から「佐藤先生が亡くなったようだ」と電話が入りました。あわてて先生の息子さんを探して確認しましたが、本当でした。先生は80歳半ばになっており、クラス会の時はある程度、自分の死期を感じていたのではないのでしょうか。車中で「俺は死んで葬儀はしないぞ」という言葉が、いまだ心に残っています。

鉦路教職員湖陵会たより

平良木氏『校訓と仕事への姿勢』

鉦路教職員湖陵会(小向聡会長・湖陵29期)の研修会が、11月14日に鉦路市内のアカペールで開催されました。

同会は、会員相互の研修を目的に、教員以外の異業種の湖陵高校同窓生を講師に迎えて開いている講演会です。

本年度は、株式会社マルエイ六峰社営業第二部長の平良木泰成氏(湖陵36期)を講師に迎え、意義ある研修会でした。

平良木氏は、昭和59年3月、湖陵高校を卒業。同61年3月、東京写真専門学校商業写真科を卒業。その後、堀内カラーやユニカラー関東に入社。平成9年に鉦路へUターンし現在に至っており、道東エリアの官庁・民間に対し営業活動を進めております。教育活動にも熱意を持っておられ、鉦路町の遠矢中学校のPTA会長の立場から、職業講話として今回の演題『校訓と仕事への姿勢』を取り上げられました。要旨をまとめて紹介いたします。

▼働くって、職業に就くことって何？

13年前からずっと8月の同窓会には出席しています。5〜6年前の同窓会の時、20期の席がなくて、あちこち探していました。後ろで「私も20期なんだけど」という声がありました。彼女は湖陵の先輩と結婚して2人で出席したそうです。夫の期のテーブルはあつたようです。何とか20期の席も用意され、本州から夫婦で来て自分だけ学

なぜ働かなくてはいけないのかを考えてみよう。生きていくため、夢を実現するため、幸せになるため、大切な人・愛する人を守るためなど、語源は「傍(はた)を築にする」。つまり、他人を築にすることからきています。

▼夢や進路について考えてみよう

自分の好きな仕事ややりたい仕事に就く方がよい。そのためには、とにかく努力しよう。汗を流して心と身体を鍛える何かをやってみよう。

▼立派な社会人をめざして

社会に出たら、必ず独りで人と関わり合っていかなければならない。コミュニケーション能力を高めよう。そのためには、まず挨拶。挨拶は基本中の基本。

▼どうしたら皆が幸せになれるのでしょうか

自分で考える、そして、まずやってみる。習って・覚えて・真似して・捨てる↓認めてもらえる。そこで、初めて一人前。自分で工夫したり、考えて会社に貢献したり、

友に会えないという最悪の状況にはならずにすみませした。残念ながら還暦の同期会には、私は九州への出張のため出席できませんでしたが、100周年の同窓会には、普段会えない学友にたくさん会うことができ、とても懐かしく、何年たっても同期、同級は変わらぬ絆と喜びでいっぱいでした。



教職員湖陵会で講演する平良木氏

人の役に立ってこそ初めて仕事をしたことになります。

▼遠矢中学校の校訓を見てみよう

『汗愛』 将来の自分のために汗を流そう。人の笑顔のために精一杯の愛を注ごう。
『自立』 自分に厳しく。自分で進路を切り開こう。

『創造』 自分が考えて(生み出して)すぐやってみよう。
『奉仕』 自分も嬉しいと思うことを人にもしてあげよう。

誰にも君に未来を贈ることはできない。何故なら、君が未来だから。
社会は、未来の君たちを待っている…。

川端 紀一(湖陵11期)

“永久の未完成” 夢見て、創造の海原を往く

平成27年度 釧路市文化賞

中江紀洋^{のりひろ}さん（湖陵15期・芸術家）

昨年8月に発行しました「くまざさ67号」の「親子三代

釧中・湖陵百年紀」でもご紹介しました湖陵15期の彫刻家、中江紀洋さんが昨年11月、平成27年度の釧路市文化賞を受賞されました。この釧路市文化賞とは、釧路市文化奨励賞とともに、釧路市の文化の発達に貢献した個人又は団体を表彰するために昭和30年に創設された、伝統ある賞であり、芸術（音楽、文学、美術及び芸能）及び科学（自然科学及び人文科学）の分野において、釧路市に多大な貢献を果たした個人・団体を表彰するという、名誉ある賞です。

1963（昭和38）年、湖陵高校を卒業された中江さんは、東京の武蔵野美術大学彫刻科へ進学、卒業後は故郷である釧路に戻り、家業であった調理師養成学校を運営するかたわら、心象風景を表現した彫刻や立体造形の制作を行なうと

1992年「風の色を見た」
（釧路市生涯学習センター 2F）

もに、美大受験を目指す高校生や社会人に絵画や彫刻を指導する「美術教室」など、長く後進の育成・指導にも当たってこられました。そんな中江さんの作品は、釧路市

の幣舞公園や北大通シンボルロード事業で設置された作品をはじめ、「札幌芸術の森野外美術館」や「とうや湖ぐるつと彫刻公園」、「室蘭市入江運動公園」、「芽室町芽室公園」などでの野外彫刻作品として常設設置されており、その芸術性の高さは多くの人々の認めるところです。また、近年も2010年には道立近代美術館において釧路出身者としては初の彫刻展を開催したほか、翌2011年には道立釧路芸術館において「北斗の彼方へ〜時間・自然・エネルギー。造形のダイナミズム」と銘打つ



幸町のアトリエで作品を制作中の中江さん

た、新作のインスタレーションを中心とした展示会を行うなど精力的に活動を続けられていました。しかし2012年、作品の保管所を兼ねていた浪花町のアトリエが火事になり、それまで制作していた作品の多くを焼失するという悲劇に見舞われることに。幸いにも中江さんは逃げ出して無事でしたが、作品の焼失を惜しむ周囲の声をよそに、「作品はまた作ればいいけれど、ノミや万力、チェーンソーなどの木彫用具や機械工具を失ったことが残念だ」と話したことが、「いかにも中江さんらしい」と周りを納得させたといえます。



2009年「未来」（釧路市北大通5丁目）

今回の「釧路市文化賞」受賞に関しても、「今年こそ中江さんに」という声が10年以上も前から上がっていたようですが、何せ当の本人に世俗的な名誉欲が皆無なため、「そんなものはいらぬよ」と固辞を続けてきたものの「中江さんが受け取ってくれないと、後に続く人もええないから」と説得され、ようやく受賞を承諾したというのが真実のようです。

そもそもこの「釧路市文化賞」では、創設2年目の昭和31年にも中江さんの曾祖母にあたるキヌさんが、「中江学園」の前身となる和裁・裁縫伝習所の運営により受賞されているという、因縁浅からぬものがあります。その子供に当たる中江さんの祖母もまた、日本画や書道をたしなむ芸術家肌の女性であったばかりでなく、耳鼻科医だった祖父もまた、釧路の若き芸術家たちのパトロンとして名を馳せた人物だったようです。

そんな芸術一家の遺伝子を色濃く受け継ぐ中江さんにとっては、今回の受賞も輝かしい経歴のほんの1ページに過ぎないものかもしれませんが、われわれ湖陵同窓生にとっては、また一つ自慢の種となる喜ばしいニュースでしょう。

アトリエ・美術教室 釧路市幸町6丁目7番6号

携帯 090-33397-9626

西村 貞広（湖陵30期）

旧交を温める 釧路湖陵同窓会総会

平成27年度釧中・釧路湖陵同窓会総会が8月8日に釧路センチュリーキャッスルホテルで開かれました。今年の当番期は湖陵33、43、53期で、会場には約500人の同窓生が集まりました。また今回は、数年に一度のくしろ港まつり期間中の同窓会。市民踊りパレードの終了時間に配慮し、例年よりも30分遅く総会がスタートしました。



500人が参加した同窓会総会



息の合った演奏を繰り広げた器楽部



合唱部がリードした校歌斉唱

校歌を斉唱したあと、この1年間で亡くなられた同窓生に黙とうをささげました。釧路湖陵同窓会の島本幸一会長(湖陵19期)は「体に気をつけて、今日は楽しい時間を一緒に過ごしましょう」とあいさつしました。続いて釧路湖陵高校の宮下祐司校長は「現在湖陵高校は1学年6クラス約720名の生徒が在籍しています」と学校の様子を報告、蝦名大也釧路市長(湖陵29期)は「先輩たちの伝統は現役の生徒たちに引き継がれています」と祝辞を述べました。このあと、議事では平成26年度の事業、決算が承認されました。

ステージでは、現役生徒たちが日ごろの練習の成果を披露しました。息のあった演奏を繰り広げた器楽部、校歌をはじめ澄み



会場を華やかにしたチアリーディング部

切った歌声を聴かせてもらった合唱部、そして会場を盛り上げたチアリーディング部、応援団のみなさん、ご苦労様でした。

懇親会では、幹事期を代表して宮下誠さん(湖陵33期)が「世代を超えて交流を深めてください」とあいさつ、東京湖陵会の正札喜久雄会長(湖陵21期)の発声で乾杯し、さっそく参加した同窓生のみなさんは、高校時代の話に花を咲かせていました。

星 匠(湖陵30期)



盛り上がった応援団

湖陵7期

傘寿祝い 鉚路で同期会

湖陵7期の同期会が9月6日に、鉚路市山花温泉リフレで開かれました。3年前に解散同期会を行いました。80歳の傘寿を迎え、「最後の同期会」として集まりました。

開校100周年に解散したものの、「傘寿にも」と約束していました。そこで、実行委員会を組織して連絡を同期生にしたところ、道外から10人、札幌から8人、十勝から2人、地元から19人の計39人が参加しました。

懇親会では、一人一人近況報告を兼ねて自己紹介。一通り終わると、各テーブルで昔話に花が咲き盛り上がりました。代表幹事の稲津順一さんは「次は米寿。鉚路にこれだけ集まるのはこれが最後では」と話していました。星 匠(湖陵30期)



山花リフレで行われた「傘寿の集い」に参加した同期生

湖陵4期27会

同期の絆を再確認

湖陵4期27会(遠藤隆吉会長)は9月27日、鉚路市内のアクア・ボールで総会と懇親会を開きました。湖陵4期は昭和27年に卒業したところから同期会を27会といっています。この日は、5年ぶりに東京、札幌からの同期生も含め、34人が集まり旧交を温めました。

総会で遠藤会長は「青春の友は一生の友。強い絆で結ばれている同期がこんなに集まり、うれしい」とあいさつしました。このあと滝沢泰雄さんが経過報告をし、幹事を務めた藤原文夫さんもあいさつし、佐藤郁男さんの乾杯で祝宴に移りました。

会場では「年をとらないね」「今度いつ会えるだろうね」などと歓談を楽しみ、久しぶりの再会に心を弾ませていました。

星 匠(湖陵30期)



アクア・ボールで行われた27会に参加した同期生

湖陵17期同期会

卒業後50年を記念

釧路湖陵高校17期（1965年卒業）の卒業50年と古希を祝う会が、3年ぶりに10月28日、鶴居村つるいグリーンパークで開催されました。岡山県や兵庫県、大阪府、東京都などから55人が出席し、旧交を温めました。

記念撮影をしたあと、発起人を代表して勇順子さんが開会のあいさつを行い、栗林延次さんの音頭で乾杯し懇親会が始まりました。校歌斉唱に続いて、クラス代表が近況などを報告しました。また、会員が製作したDVD「津軽を渡った仲間たち」が上映され、出席者は高校時代に戻ったかのようになり、当時を思いながら語り合い、喜寿（77歳）での再会を誓い合っていました。



グリーンパークで行われた湖陵17期同期会

摩周湖陵会

歓談の輪広がる

弟子屈町と標茶町の同窓生が集まる摩周湖陵同窓会（岩崎寛会長）が、11月20日に弟子屈町の川湯観光ホテルで2015年度総会を開きました。会員は約40人で、この日は9人が参加しました。

総会では校歌を斉唱したあと、岩崎会長は「青年の頃に戻り、思いで話を語ってください。今後も一層、親睦を深めましょう」とあいさつしました。懇親会では、それぞれの世代が高校時代のエピソードを披露し、歓談の輪が広がっていました。なお、総会では役員改選も行われましたが、岩崎会長をはじめ、役員全員が留任しました。

星 匠（湖陵30期）

摩周湖陵同窓会総会



弟子屈町と標茶町の同窓生が参加した摩周湖陵会（釧路新聞社提供）

室蘭湖陵会

釧路の思い出話に華

11月13日に、復活した室蘭湖陵会が同市内の喜むら鯨で開かれました。過去発行された釧路湖陵高校開校記念誌などには、室蘭湖陵会が記載されていたものの、現在は休眠状態でした。

そこで釧路湖陵同窓会・青木一晃幹事長（湖陵27期）の同期で近藤覚也さんが同市に在住でしたので、開催に向けて準備が進められ、実現しました。

同会には、湖陵4期の佐々木ミヤ子さんをはじめ、10人が参加しました。近藤さんによると、ほとんどが初対面だったということですが、高校の話になると地酒「福司」の差し入れもあったこと

もあり、一気打ち解け、交流を深めたそうです。

近藤さんは、「定期的に開催したいですね。室蘭地区にお住まいの方は、ぜひご連絡を」と呼びかけていました。

星 匠（湖陵30期）



久しぶりに開かれた室蘭湖陵会

湖陵15期 3Hクラス会

50年ぶりに授業も

9月18日に釧路プリンスホテルで、湖陵15期3年日組のクラス会を開催しました。私たちは戦後復興の象徴とされる、東京オリンピックの前年、昭和38年に卒業しました。オリンピックの槌音が北辺の土にまでこだましたのか、来春の受験やら就職を控えての高揚感なのか分かりませんが、クラスの中には不安な孔雀が羽を広げるように、ことさらに自分たちを膨らませようとする雰囲気があった。湖陵祭のために作った巨大な「トロイの木馬」がその結実でした。1階以上の車輪を持つ木馬は、市中を練り歩くにも、祇園祭の鉦の巡業のように電線を持ち上げる棒が必要で、後に少々ひんしゅくを買ったと聞きました。



60歳を過ぎてから、ほぼ2年おきに、釧路、札幌、東京と持ち回りで言うたびに発行される「トロイの木馬」も今回で8号となりました。年々、誰しもが釧路との地縁が薄くなる中で、多くの参加者を得るために、今回は恩師の高井博司先生(湖陵6期)に、50年ぶりの授業をお願いしました。クラス名簿には、50名登録され、連絡不可能な友11名、物故者7名、出席可能と思われる級友は32名ですが、湖陵という学校の性格上、全国に散らばっており中にはブラジルで生活している友もいます。それでも19名もの級友が東京、札幌から参加してくれました。確か当時は理科系と言われたクラスには、わずか5名の女性がいいて、そのうち2名が参加し、旧交を温め合いました。



15期3Hクラス会に参加したクラスメイト

食事会の前に、高井先生の授業が行われました。演題は「TVを視聴して気になったことばの誤用あれこれ」で、主に最近のアナウンサーの言葉の誤用がテーマとなりました。クラスの中には、NHKやUHBに勤務していた級友もいて、神妙に、かつ時折議論を交えながらの楽しい授業となりました。普段聞き逃している誤用も、さすが国語の先生には気になるのである。その後の食事会では、参加者から近況などが発表され、和やかな雰囲気の中で、終了しました。

前回のクラス会は、鎌倉で行われましたが、その時の決めごとは、2020年の東京オリンピックの年に再度東京でのクラス会を開くことでした。散会の際には2年後の札幌、4年後の東京での再会を約束しました。

根津 文博(湖陵15期)

編集後記

昨年11月に釧路ロケ50作目の映画「起終点駅ターミナル」が全国公開されました。原作は釧路が誇りとする直木賞作家・桜木紫乃です。▲2014年夏にオール釧路ロケされた場所は、釧路駅と駅前周辺、駅前和商市場の吉岡肉店、栄町3有楽街センターで軒の行灯とスナック八重ちゃん店内、幣舞橋、大町の高後医院窓口、宮本町の釧路刑務所高堀、千歳町の裁判所坂道、益浦2、若松町グリーンホテル通とスナック久美の行灯、釧路労災病院の緊急車両入口、釧路町から厚岸町の国道44号、白糠町役場廊下と町長室、白糠町管住宅、白糠

駅からのJR根室線、鶴居村アパート、帯広市のチェーン居酒屋・山内農場店内、浦幌町厚内の漁業家と番屋など室内撮影を含め総て現地ロケは珍しい手法です。▲映画制作上ロケ撮影は天候や季節に影響され予算を超える滞在費がかかる、現地で調達・手配できない撮影資材の大量持ち込みなどの課題があります。観客に嘘っぽくない安心感を与えます。▲作者・桜木紫乃は釧路地裁勤務の経験を生かし、人それぞれの人生と機微を見事に捉え小説の世界で成功しま

した。映画公開の時、俳優などはステージ挨拶で「人との出会いは次の自分を育ててくれる、ためらう自分に勇気を与え背中を押してくれた、この作品で出会えた人々のすべてに感謝」この言葉は映画を観た者に残像が刻まれる。

田巻 恒利
(湖陵18期)



堀川、田巻、星、須貝、西村、川端(左から)

釧路湖陵高校

〒085-10814
釧路市緑ヶ岡3丁目1番
TEL(0154)43-3131
ホームページ
<http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/>

くまざさ編集委員会

- 同窓会会長 島本幸一(湖陵19期)
- 同窓会会計長 佐藤文昭(湖陵22期)
- 編集委員長 星 匠(湖陵30期)
- 編集委員 川端紀一(湖陵11期)
- 編集委員 堀川春昭(湖陵12期)
- 編集委員 澁谷倫之(湖陵26期)
- 編集委員 西村貞広(湖陵30期)
- 編集委員 須貝喜治(湖陵49期)
- 編集事務局長 田巻恒利(湖陵18期)

くまざさ編集委員会

〒085-10014
釧路市末広町2丁目4番地
TEL0154(23)0241
手動切替FAX 0154(23)0242